切子ガラスくびれ括碗の系統と伝播

谷 一 尚*

ABSTRACT Takashi TANIICHI, *Eastern Diffusion of the Roman Hemispherical Bowl with Facet Decoration*: There is no established theory about the origin of the hemispherical bowl with facet decoration which was excavated at the tomb 126 of the Niizawasenzuka in Kashiwara, Nara-prefecture, Japan (Type II). But some similar hemispherical bowls are found at the vestiges of the roman glass vessels — Tanais in the northern shore of the Black sea, Karanis in Egypt, Sardis in Turkey, Dura Europos in Syria, Himlingøje in Denmark, Köln in Germany, etc (Type I). And recently, some Type I examples are excavated at Gulougang in Nanjing and Wulidun in Hebei Province, China.

About the western vestiges as Tanais, Dura Europos and Karanis, the buried dates can be fixed practically (Tanais was broken down by the great fire in the 240's, the glass bowls I mentioned above were excavated at the stratum just before the fire. Dura Europos was in existence at most as long as 256, when it was ruined by the attack of Shapur I, the Sassanian King. So the date of the vestiges are almost equal). On the other hand, about the examples excavated in China, even if the epitaph is not found, but the buried date can be settled by comparing with the remains which are excavated at the other similar dated tombs (the date is Xijin or early Dongjin period, from the end of the third century to early fourth century.).

So as far as Type I is concerned, in the west, they were made in the middle of the third century, and in the east, in the middle of the third century or at the beginning of the fourth century. And this disparity of the term shows the term which was needed for its diffusion.

In turn, the hemispherical bowls with facet decoration like the excavation from the Niizawasenzuka (Type II) are found at some vestiges of early Sassan period — at Tell Mahuz, Choche in Mesopotamia.

* 岡山市立オリエント美術館学芸員

They are the preceding form of the Shosoin-Type, which are excavated at Kish in Mesopotamia, etc. (produced in the middle of the Sassan period).

In this thesis, standing on these facts, the eastern diffusion of the hemispherical bowl with facet decoration is considered.

はじめに

切子ガラス^{くびれ}括碗とは、宙吹きガラスの技法により、薄手の碗形に成形し、口縁下部にあたる箇所⁽¹⁾に窪みを入れて切断し、徐冷後、器表面に切子による装飾を施した碗の総称である。我々に身近な例としては、我国奈良県橿原市の新沢千塚 126 号墳で出土した切子括碗があるが、この括碗の出自については、イラン出土とされる類品が数点存在するものの、正式の学術発掘調査による出土例は殆んど知られておらず、不明の点が多かった。

一方、これに類似した切子ガラス括碗は、黒海北岸のタナイス⁽²⁾ (Tanais)、パ
ンティカパイオン (Panticapaion)、オリビア⁽³⁾ (Olbia)、エジプトのカラニス⁽⁴⁾
(Karanis)、シリアのドゥラ・エウロポス⁽⁵⁾ (Dura Europos)、アナトリアのサル
デイス⁽⁶⁾ (Sardis)、ドイツ・ライン地方のケルン⁽⁷⁾ (Köln)、トリアー⁽⁸⁾ (Trier)、デ
ンマークのヒムリンギョイエ⁽⁹⁾ (Himlingøje) などで出土しており、最近では、
中国南京市の鼓楼崗や湖北省の五里墩でも出土が確認されている。

タナイス、カラニス、ドゥラ・エウロポスといった西方の遺跡では、ほぼその埋蔵年代が確定でき、また、中国出土例も、墓誌は発見されていないものの、他の紀年のある類似墓の伴出遺物等との比較から、ほぼその埋葬年代が推定できる。

新沢千塚出土例と酷似した切子括碗も、メソポタミアのテル・マフーズ⁽¹¹⁾ (Tell Mahuz) やヴェー・アルダシール⁽¹²⁾ (現コケー Choche) といった、ササン朝ペルシア期の遺跡から出土しており、新沢千塚碗の出自について重要な示唆を与える資料となっている。

この小論では、以下、東西両域における切子ガラス括碗の出土例を整理して、その編年を試み、これらの事実を通して、切子ガラス括碗の系統と伝播の問題について、考察しようとするものである。

I. 西方における出土例

切子ガラス括碗の分布はかなり広範囲にわたっており、黒海北岸のタナイス、パンティカパイオン、エジプトのカラニス、アナトリアのサルディス、シリアのドゥラ・エウロポス、ドイツ・ライン地方のケルン、トリニア、デンマークのヒムリングョイエ、メソポタミアのテル・マフーズ、ヴェー・アルダシールなどでの出土が確認されている。

(1) タナイス、パンティカパイオン、オリビア（黒海北岸）

タナイスはアゾフ海の東端に位置し、本格的調査は1955年から61年にかけて、下部ドン河調査隊によって行なわれ、およそ 300 例のガラス器の断片が出土した。タナイスにおいては、墳墓からのガラス器の出土は殆んどなく、都市遺構からの出土が大半であったため断片が多い。

1 タナイス出土碗
(Сорокина, 1965)

タナイス出土の切子括碗は、口縁下部がやや窪み、口縁は軽く外反している。

出土例の多くが口縁の仕上げを欠き、粗面を呈しているのが特徴的で、これは新沢千塚出土碗と同様である（ただし切子の施文形態は異なる）。切子括碗は、全部で22例出土していて、タナイスで最も頻出する器形である。

このうち、胴部中央付近に数列の縦の短刻線文様帯を並べ、その下に円形・楕円形の切子帯を配し、各文様帯間を水平刻線文で区画する施文形態のものが最も多く、12例出土している。素地は一様に緑色を帯びた淡黄色で、乳白色を帯びた虹色の風化現象が表面に認められる。ちなみに、タナイスでは、同様器形であるが、切子による施文が貧弱で、円形や楕円形の切子文を欠き、単に縦の短刻線文のみのもの（4例）、平行刻線文のみのもの（6例）も出土している。⁽¹³⁾

パンティカパイオンは、現在のケルチ（Kerch）市の背後で海に接しており、遺跡はミトリダテス（Mithridates）と呼ばれる丘の麓および傾斜地を中心に広がっている。1945—49年と52—53年にブラバッキ（Блаватский, В. Д.）により発掘調査された。⁽¹⁴⁾ 切子括碗は、タナイスで出土したものと同様の、円形・楕円形切子を施した作品の底部が2例出土しているだけで低調であるが、その代わり、器形は異なるが同じ施文形式の水差しやカンファロス杯は、タナイスで

は断片が出土しているだけであるのに対し、バンティカパイオンで、は完形品が9例出土している。⁽¹⁵⁾

また、ブーグ河口西岸のオリビアでも、縦の短刻線文と平行刻線文のみの括碗断片が出土している。⁽¹⁶⁾

(2) カラニス (エジプト)

カラニス (コーム・アウシーム (Kôm Aushim)) はナイル河下流のファイユーム盆地にある遺跡で、1924年以降、ミシガン大学の調査により、ローマ期の遺構が明らかにされた。1924年から29年に到る5年間に、発掘によって出土したガラス器は完形品だけでも150点にのぼり、断片などを加えると数千を数えるという。ミシガン大学の正式発掘による出土ガラス器はハーデンによって集成され公刊されている。⁽¹⁷⁾

カラニスにおいては、口縁下部にくびれのある括碗は、a. 無色のガラスを用いたものと、b. 有色のガラスを用いたものとに分けられ、無色ガラスの場合は、(i) 切子文のあるもの、(ii) つまみ文のあるもの、(iii) 彩文のあるもの、の3種、有色ガラスの場合は、(i) 無文のもの、(ii) 水平刻線文のみのあるもの、(iii) 水平刻線文と突起文のあるもの、(iv) 型吹き文のあるもの、の4種に分けられる。本論で対象としている無色ガラス切子括碗は、やや幅広の器形で、水平刻線文の他、縦短刻線文、横短刻線文、楕円形切子などを施しており、建物Bを中心に12例出土している。素材は、無色乃至緑色を帯びた無色のガラスで、気泡は比較的少ない。風化は乳白色、曇りの状態のものが多く、銀化を示すものは少ないという。薄手である。ハーデンの分類では、素材は(2)に属する。⁽¹⁸⁾

(3) サルディス (アナトリア)、ドゥラ・エウロポス (シリア)

サルディス⁽¹⁹⁾やドゥラ・エウロポス⁽²⁰⁾でも、水平刻線文と楕円形切子とを施した括碗や、斜格子刻線文を組合わせた括碗の断片などが出土しているが、正確な出土地点や出土状況等は不明である。

(4) ケルン、トリーア (ドイツ)

ドイツ・ライン地方のケルンでも、口縁下部に2条の水平刻線文を施し、その下に順に横長小楕円切子、縦楕円切子、円形切子を配した括碗や、胴部中央に3段の縦楕円形切子を、底部に円形切子と工字形切子とを交互に施した括碗などが、ノイサー通り (Neußer Straße) の墳墓等で出土している。またルクセンブルグ通り (Luxemburger Straße) では、斜格子菱形文の切子括碗が、セベリン教会 (St. Severin) 下の墳墓では同様切子のカンファロス杯が出土している。⁽¹²⁾

2 ケルン出土碗
(Doppelfeld, 1966)

3 ヒムリンギョイエ出土碗
(Ekholm, 1963)

一方、トリーアでは、カラニスやタナイスでもみられた、縦の短刻線文や水平刻線文のみの切子括碗や、⁽²²⁾ドゥラでみられた斜格子菱形文の切子括碗が出土している。⁽²³⁾

(5) ヒムリンギョイエ (デンマーク)

北欧デンマークでは、ゼーラント (Sjælland) のヒムリンギョイエで、口縁下部のくびれがやや浅く、開口部幅広の切子括碗が出土している。口縁下部と胴中部とに水平刻線文を施し、胴上部には交互に2段の縦短刻線文帯を、胴下部には、円形切子文様帯を配し、個々の円形切子間の上下に横短刻線文を置いたものである。⁽²⁴⁾類品は、ゼーラント、フューネン (Fyn (Fünen)), ユトランド Jylland (Jutland)) などデンマークを中心にした地域に濃密である。⁽²⁵⁾

この他、素文の括碗は、デンマーク・ゼーラントのリル・ヴェレーズ (Lille Vårløse), ⁽²⁶⁾ノルウェーのヴァルスタット (Valstad) などでも出土している。

(6) テル・マフーズ, ヴェー・アル ダシール (メソポタミア)

テル・マフーズは、北部メソポタミアのキルクーク (Kirkuk) 近郊に位置し、エル・アッパシー (El-Abbasi) 河の古代の河床に沿って広がっている。1936—37年にその一部がダム工事のため発掘された。戦前の発掘であるので、遺構については現在不明の点も多いが、出土したガラス容器は49点に及び、そ

4 テル・マフーズ出土碗
(Ponzi, 1968—1969)

の大半が、テルから 400m ほど離れたネクロポリスの墓構に伴う素焼きの棺内から出土したものとされている。この墓地は、テルから東南東の方向に広がる、未発掘の都市遺跡に付属するものと考えられている。発掘した墓構は、記録に残るのは40墓であるが、総数は60—70墓にのぼると考えられており、それらの墓構はすべて、一区画内に集まっていた。墓構の形態は、セレウキア (Seleucia), アッシュール (Assur), バビロン (Babylon), カクズ (Kakuz), ヌジ (Nuzi), ドゥラ・エウロボスなど、メソポタミア内外の、パルティア末ササン朝初期のそれとよく似ているとされる。⁽²⁷⁾

出土した切子括碗は 2 点。1 点はやや幅広の括碗で口縁は外反。胴部中央に 1 列 8 個のやや横長の楕円形切子を施し、その上下に 2 条の水平刻線文を配す。底部中央にも 1 個の円形切子を置く。やや厚手の、灰色を帯びた淡緑色のガラス製で、気泡がある。淡黄白色の風化層がみられ、口縁部は一部欠けている。⁽²⁸⁾ 口縁部径 10.83cm, 高 7.25cm。

他の 1 点は、ほぼ球形に近い器形の括碗で口縁下部に 2 条の水平刻線文を有し、その下の胴部に 5 段の円形切子文様帯を施す。その数は上から順に、19, 19, 15, 11, 6 個。それに続いて底部中央に 1 個の円形切子を施す。やや黄味を帯びた、殆んど無色に近い、淡緑色のガラスでつくられており、気泡も多い。黄白色の銀化層が表面にみられ、口縁部は一部を除き欠損している。⁽²⁹⁾ 口縁部径 10.67cm, 高 8.6cm。

一方、ヴェー・アルダシール (現コケー) は、中部メソポタミアのテンフオン近郊に位置し、対岸のセレウキアとともに、1964 年以来、イタリア隊が発掘調査を進めている。⁽³⁰⁾

ヴェー・アルダシールは、その名が示すように、ササン朝ペルシアのアルダシール I 世 (Ardashir I) (224—241) が、セレウキアの対岸に建設した新都で、家屋は依然として日乾燥瓦造りであったが、セレウキアに見られたような、ヒッポダモス式の基盤目状のギリシア的都市区画は全く認められず、円形の城壁に囲まれた内部は、中心から放射状に街路が走り、商店や工房などが不規則に立ち並んでいるのが確認されている。出土したガラス括碗は、テル・マフーズ出土の後者と酷似した、球形器形、円形切子のみの薄手の括碗の断片で、未発表資料であるため、出土地点、出土状況等の詳細は不明である。⁽³¹⁾

以上の西方における出土例のうち(1)～(5)は、いずれも、所謂ローマン・ガラ

スの出土地に属するもので、器形的には、口縁下部の括れがあまり大きくなく、切子形態も、各種の切子を複合させているのがその特徴であった。

ところが(6)においては、口縁下部の括れが大きく、器形が球形に近く、切子形態も水平刻線文の他は、円形切子のみという、他のローマン・ガラス出土地では、見出せないタイプの切子括碗が出土している。この傾向は、イラン出土と称される一群の切子括碗にも一般的に認められ、所謂ササン・ガラスではないかと考えられる。後述の新沢千塚出土碗が、ほぼこのタイプに属することは、その伝来を考える上で示唆的である。

II 東アジアにおける出土例

東アジア地域における、切子ガラス括碗の出土例は、現在までのところ、中国で2例、我国で1例が知られている。

(1) 湖北省鄂城縣五里墩

ごく最近発掘され、報告書が未公開（現在出版準備中という）であるので、出土状況等の詳細は不明であるが、出土したのは、球状の腹部をもった円底の括碗の断片で、口縁部は外反し、開口部が大きく外側に開いている。淡黄緑色を呈する。小さな気泡を含んだ、ほぼ無色透明のガラスでつくられている。口縁下部に2条の水平刻線文、胴中部に1条の比較的幅広の水平刻線文を施し、この上下に各1列計2列の楕円形切子文様帯を施す。また底部には中央に円形切子を1、その周囲に楕円形切子を8配している。口縁切口は、研磨により平らかに整えられている⁽³²⁾。口縁の整形を焼成により行なっているのであれば、ポンテ竿（受竿）を用いて成形し、底部中央の切子により、ポンテ跡を消したとも考えられるが、口縁切口の整形を研磨によっているので、必ずしもポンテ竿を用いなくても製作が可能である。出土した断片の一部を用いて成分分析が行なわれており、アルカリ・ソーダ・ガラスであることが確認されているが、その分析値が、新沢千塚出土碗と酷似していることが注目される。⁽³³⁾

(2) 江蘇省南京市鼓樓崗

南京市の南京大学北園東北部鼓樓崗南坡上の墳墓で、1972年4月、南京大学の発掘により出土したもの。鼓樓崗遺跡は、主室・甬道・側室・側室甬道等を備えた一座双室の塋室墓で、全長南北8.04m、東西9.9mの比較的大規模な塋室墓。主室頂部はアーチ状をなしていたと考えられるが、主室四壁とも残存しているのは床面から1m前後で、上部はけずりとられており、天井部の構造は

不明である。⁽³⁴⁾

出土したのは、口縁下部がやや窪み、腹部のふくらんだ、口径約10cm、壁厚0.1cm程度の切子ガラス括碗の断片で、同一容器に属するものと考えられている。比較的透明度のある無色に近いガラスでつくられており、表面が多少風化して白色を呈している。口縁下部と中腹部とに、それぞれ2条の水平刻線文をめぐらし、その上下に対称形に、上部の切子は尖端が上向き、下部の切子は先端が下向きの縦長の楕円形切子の連続文を施している。⁽³⁵⁾

湖北省出土例と同じく、宙吹ガラスの技法で器形をつくり、口縁下部にくびれ目を入れた後切断して徐冷。容器が完全に冷えてから、固定した彫刻器に容器を回転させて、まず水平刻線文を口縁下部と胴中央部に施し、あたりをつけてから、楕円形切子を施したものと考えられる。後述の多くの西方出土例が示すように、水平刻線文は、2条1組で施すのが一般的で、2条で平行にめぐらされているため、隆線文的効果を示している。この作品の場合、水平刻線文用と楕円形切子用と、少なくとも2種の彫刻器を用いている。

(3) 奈良県橿原市新沢千塚

1963年8月、橿原考古学研究所により発掘された。墳丘は、ほぼ東西にのびており、復元長辺22m、短辺16m、高さ1.5m程度の扁平なもの。埋葬施設は、墳丘頂の直下にある、木棺が安置されていた。その木棺内の被葬者の頭部付近より、切子ガラス括碗と紺色ガラス皿とか、皿の上に碗をのせた形態⁽³⁶⁾で出土した。

切子ガラス括碗は、⁽³⁶⁾、淡黄緑色の、ほぼ透明のガラス製。口縁下部がくびれ、胴部は球形に近い。口径7.8

cm、最大腹径8.7cm、高6.7cm、厚0.1～0.15cm。碗表面の腹部と底部とに、円形切子のみを施している。ただし、腹部の場合は、各段19個ずつ5段に円形切子を並べているが、最上段・中央・最下段の3段のそれは、表面が荒削りされたままの状態でも直径も0.9cmとやや小さい。これに対し、2段目・4段目の切子は、表面が美しく磨き上げられ、直径も1.1cmとやや大きい。磨きの切子が、四方の荒ざり円文の上に乗りかかっているので、磨き切子の方が後で行な

5 新沢千塚出土碗
(橿原考古学研究所, 1977)

われたことがわかる。一方、底部の切子は、内側4個、外側9個ですべて荒ずりのままである。⁽³⁷⁾

このような切子形態は、現在までのところ数多い西方出土例中にも例をみない特殊なものである（ただ、イラン出土と称される作品に1例、やはり胴部5段の円形切子括碗があり、最上段・中央・最下段の3段の切子に金彩を施したものが知られている）。⁽³⁸⁾

また、口縁部の処理も特殊で、切り放したぎざぎざのままの状態⁽³⁹⁾で、口焼きも研磨仕上げもしていない。ただし、この類別は、後述黒海北岸のタナイス出土例中の括碗に一般的に認められる。⁽⁴⁰⁾

新沢千塚出土碗では、底部中央にポンテ跡もそれを消すための切子もなく、ポンテは使用していないことは明らかである。⁽⁴¹⁾（ポンテは中央につけないと器形がいびつになってしまうが無理である）。

Ⅲ 西方出土例の編年

西方における編年の基準となるのは、タナイス、カラニス、ドゥラ・エウロポスなどである。

(1) タナイス

タナイスは240年代に火災により崩壊しており、出土ガラス器の大部分が、この火災直前の2—3世紀前半の層位から出土しているため、火災による崩壊を契機として、比較的正確に出土遺物の年代を定めることができる。

切子括碗の断片は、この240年代の火災により壊滅した家の地下室で出土し、しかも明らかに火により変形していた。従って、火災直前まで使用されていたと考えられ、240年頃が、タナイス出土例の下限となる。

器形は異なるが、同様の施文形態をもつ、水差やカンファロス杯も、同様の出土状況であるので、こういった切子施文形態は、タナイスでは、ほぼ3世紀前半に盛行したとみることができる。⁽⁴²⁾

(2) カラニス

カラニス出土の数千点に及ぶガラス器は、ハーデンにより9種類の素材に分類されている。彼は、遺跡の各層位に発見された25の代表的建物遺構から、一括遺物として出土したガラスの素材と建物の年代とを比較研究することにより、出土ガラス器の編年を行なっている。切子括碗は、建物Bを中心に出土しており、素材は(2)に属していて、カラニス古期、2—3世紀中葉頃とされる。この⁽⁴³⁾

年代は、タナイスのそれと一致している。

(3) ドゥラ・エウロボス

ドゥラ・エウロボスにおいては、切子括碗の明確な出土状況・地点は不明であるが、この遺跡は、ササン朝ペルシアのシャープール I 世 (Shapur I) により、256 年に壊滅的打撃を受けており、これを下限と考えれば、その年代は、カラニス、タナイスのそれとはほぼ一致する。⁽⁴⁴⁾

(4) ケルン

ケルンでは、楕円形切子などを施した括碗が、ノイサー通りで、斜格子菱文の切子括碗がルクセンブルグ通りで、斜格子切子のカンファロス杯がセペリン教会下の墳墓等で出土しており、伴出したローマ貨幣の年代などから、楕円形切子が 3 世紀前半頃、斜格子切子は、3 世紀後半～4 世紀と考えられている。⁽⁴⁵⁾

(5) ヒムリングョイエ

典型的切子括碗の出土したヒムリングョイエ古墳は、埋葬年代を示す明確な資料を伴出していないが、類似した切子ガラスを出土したデンマークのジーラントのヴァルペレフ (Varpelev) 古墳では、プロブス帝 (Proubus) (276—282) 貨幣を、ニュルプ (Nyrup) 古墳では、コンスタンティン I 世 (Constantin I) (324—337) 及びコンスタンス (Constans) (337—350) 貨幣を伴出しており、3 世紀後半—4 世紀頃の年代が考えられる。⁽⁴⁶⁾

(6) テル・マフーズ、ヴェー・アルダシールは、ササン朝ペルシアのアルダシール I 世 (224—241) が、セレウキアの対岸に建設した新都であるから、その上限が 3 世紀前半でおさえられる。

また、テル・マフーズではホルムズド II 世 (Hormuzd II) (303—309) やシャープール II 世 (309—379) 銀貨といった、ササン朝初期の王の貨幣を伴出しており、4 世紀頃が想定される。⁽⁴⁷⁾

IV 東アジア出土例の埋葬年代

(1) 五里墩

発掘報告書が公開されていないので、詳細は不明であるが、墓構形態や伴出遺物等から西晉期 (265—316) と考えられている。⁽⁴⁸⁾

(2) 鼓楼崗

南京鼓楼崗遺跡についても、墓誌が出土していないので正確な年代は不明であるが、墓構の形態や伴出遺物が南京市挹江門外老虎山の顔謙夫人劉氏墓<東⁽⁴⁹⁾

晉永和元年（345）⁽⁵⁰⁾や南京市象山7号墓＜東晉太寧元年（322）頃＞などのそれに近似していることから、東晉初期、4世紀前半頃が考えられる。

(3) 新沢千塚

やはり墓誌等が伴出していないので正確な埋葬年代は不明であるが、出土した青銅製熨斗の器形、火皿部の長径と柄の長さとの割合などの比較から、中国遼寧省北票県西官営子の馮素弗墓＜北燕太平7年（415）⁽⁵¹⁾＞出土例と百濟武寧王陵王妃副葬品＜己酉年（529）葬＞との間に位置するものと考えられる。また、新沢千塚出土の金製方形板（歩搖冠か）についても、遼寧省北票県房身村2号墓（晉代の鮮卑墓とされる）出土例と、その退化形態と考えられる武寧王妃副葬品との間に位置するものとされ、126号墳の遺構やその他の遺物などから判断して、5世紀後半頃の埋葬と考えるのが妥当であろう。⁽⁵²⁾

ちなみに、126号墳に副葬された装身具等には、埋葬当時すでに損傷したり欠失したりしていたと思われるものがあることが指摘されており、このことから考えて、少なくとも副葬品の一部は、その製作から埋葬までの間にかなりの時間があつたことが想定される。⁽⁵³⁾

V 切子ガラス括碗の系統と伝播

以上検討してきたように、切子ガラス括碗には、器形的には、(i)幅広で口縁下部の窪みが浅いものと、(ii)球形に近く、窪みが比較的深いものとの2種があり、施文形態も(i)素文、(ii)水平刻線文のみ、(iii)水平刻線文に縦の短刻線文、(iv)楕円形切子、(v)円形切子、などの要素があり、それらを複合した作品も多い。

これらの括碗は、ローマン・ガラス系の広範な地域で、多様な形態をとって、数多く出土しているが、我国新沢千塚やメソポタミアで出土した、球形に近い器形をもち、円形切子のみを表面に施した括碗は、現在までのところ、ローマン・ガラス系の遺跡では殆んど出土しておらず、別の系統を想起せしめる。

西方における切子括碗は、まず器形的には1世紀後半のアキレイア出土例などに（施文が切子でなく型吹きリブ文であるが）括碗の形態が認められ、次いでカラニス出土例にみられる、2～3世紀前半の、縦横の短刻線文や楕円形切子の括碗が一般的となり、3世紀後半～4世紀にかけては、ケルンなどを中心とした、斜格子菱形文の切子碗が普及する。⁽⁵⁴⁾

この切子括碗の中心地の消長は、そのままローマン・ガラスの中心地の移動

を反映していて興味深い。

括碗のみでなく、水差やカンファロス杯などの器形も含めて、各種の切子の施されたガラス器を、タナイス出土ガラスの集成者ソロキナ (Сорокина, Н. П.) が、ケルン型切子ガラス器と総称し、北欧出土ガラスの集成者エクホルム (von Ekholm, G.) が、カラニス型と呼んだ⁽⁵⁵⁾のは、単に名称だけの問題ではなく、黒海沿岸や北欧における、この種のガラス器の製作地乃至は技法的震源地をどこに求めるかという、彼らの考え方を反映しているように考えられる。

一方、円形切子のみを全面に施す施文法は、1世紀後半のポンペイ (Pompeii) ヘルクラネウム (Herculaneum)、ヴィンドニッサ (Vindonissa) など⁽⁵⁶⁾にその類例がみられるが、2世紀以降になると、ドゥラ・エウロポス、サルディス、ケルン、トリニアなどでみられる複合円形切子などの例が示すように、単一切子で器表全面をおおう施文法は殆んどなくなり、他の切子文様と複合させるものが一般的となり、以後その伝統が続くのである。

ところが、この、ローマ圏では用いられなくなった単一の円形切子による施文法の伝統は、テル・マフーズやヴェー・アルダシールといったメソポタミアや伝イランの出土例が示すように、3世紀以降のササン朝ペルシアにひきつがれたと考えられる。そしてこの伝統は、メソポタミアのキシュ (Kish) やテシフォン (Ctesiphon) の出土例⁽⁵⁷⁾が示すように、ササン朝中期 (5—6世紀) において、単一の円形切子を施した厚手のガラス碗——すなわち正倉院タイプの切子碗——へと発展するのではないだろうか。

メソポタミア出土の切子括碗は、ササン朝ペルシアが、ローマン・ガラスの技法・伝統をとり入れながらつくりあげた初期の作品であり、新沢千塚出土碗も、どちらかといえばこの系統に属する可能性が強い。ただし、新沢千塚では、切子括碗に伴って、コバルト着色のガラス皿⁽⁵⁸⁾が出土している。これは、本体からひねり出した環状の高台をもつ、口径14.5cmの浅皿で、見込表面になされた絵付を別とすれば、器形・技法とも、カラニスなどで出土するローマン・ガラスのそれと酷似している。カラニス出土のガラス皿は、ハーデンにより第1群に分類されており、この形態は、カラニスでは3世紀末に現われ、4世紀初めに最も広く普及し、4～5世紀を通じて汎用されたものである。この年代は5世紀後半と考えられる新沢千塚126号墳の年代とさほど矛盾せず、伝播年代を考慮すれば、むしろ妥当といえる。新沢千塚出土のガラス皿にはポンテ跡が見られ、ポンテを用いていない括碗とは、同じ宙吹き技法でも差異がある。両が

ラス器はもともと1セットでつくられたものではなく、伝来の経路も別々の可能性も否定できない。

一方、中国出土の括碗は、切子の施文形態が複合されていることや、南京象山その他でも、ローマン系切子ガラスが出土していること⁽⁶⁰⁾などから、その系統の輸入品と考えられる。

タナイスやカラニスにおけるこの種の切子括碗の下限が3世紀中葉で、中国出土例の埋葬年代が3世紀後半～4世紀前半であるから、これが伝播年代の差ということになる。文献等に著わされた⁽⁶¹⁾晉代の外来ガラス愛好熱をよく反映した作品ということができよう。

この小論は、1984年11月18日、慶応義塾大学における、日本オリエント学会第26回大会での発表をもとに、加筆補正したものである。

注

- (1) 深井晋司『ペルシアのガラス』、淡交社、1968、169頁、図版9、挿図33、34。
- (2) Сорокина, Н. П. “Стеклянные Сосуды из Танаиса, Древности Нижнего Дона”, *Материалы и Исследования по Археологии СССР*, (以下 *МИА*), № 127, Москва, 1965, стр. 204-215.
- (3) Harden, D. B. *Roman Glass from Karanis, found by the University of Michigan Archaeological Expedition in Egypt, 1924-29*, (University of Michigan Studies, Humanistic Series, XLI), Ann Arbor, Mich. 1936, pp. 95-127.
- (4) Clairmont, C. W. *The Glass Vessels, The Excavations at Dura-Europos*, Final Report IV. Part V, New Haven, Conn. 1963, pp. 65-68, pl. XXV.
- (5) von Saldern, A. *Ancient and Byzantine Glass from Sardis*, (Monograph, Archaeological Exploration of Sardis 6), Cambridge, Mass. 1980, pp. 15-18, pl. 3.
- (6) Doppelfeld, O. *Römisches und Fränkisches Glas in Köln*, (Schriftenreihe der Archäologischen Gesellschaft köln, XIII), Köln, 1966, S. 64, Taf. 148.
- (7) von Goethert-Polaschek, K. *Katalog der Römischen Gläser des Rheinischen Landesmuseums Trier*, (Trierer Glabungen und Forschungen, Band IX), Mainz am Rhein, 1977, SS. 50-61, Taf. 38-39.
- (8) von Ekholm, G. “Scandinavian Glass Vessels of Oriental Origin from the First to the Sixth Century”, *Journal of Glass Studies*, Vol. V, Corning, N. Y, 1963, pp. 33-37, figs. 12, 33, 34.
- (9) 南京大学歴史系考古組「南京大学北園東晉墓」,『文物』1973年第4期,北京,44—45頁,図3。
- (10) 安家瑤「中国的早期玻璃器皿」,『考古学報』,1984年第4期,北京,419—420頁。
- (11) Ponzi, M. N, “Sasanian Glassware from Tell Mahuz (North Mesopotamia)”,

- Mesopotamia*, Vol. III/IV, 1968–1969, Firenze, pp. 359–361, figs. 157, 161.
- (12) 榎原考古学研究所『新沢千塚126号墳』, 奈良県教育委員会, 1977, 46—47頁, 第27—28図, 84—87頁, 図版29, 31—33。
- (13) Сорокина, Н. П. *op. cit.*, стр. 204–215.
- (14) Блаватский, В. Д. “Отчет о Раскопках Пантикапея в 1945–1949, 1952 и 1953 гг.” *МИА*, № 103, 1962, стр. 6–85.
- (15) パンティカパイオンの出土ガラス全般については, Сорокина, Н. П. “Стекло из Раскопок Пантикапея, 1945–1959 г.г.”, *МИА*, № 103, стр. 210–236. 括弧については注(2)。
- (16) オリビアの発掘については, Кеви, Е. И. “Ольвийская Агора”, Ольвия и Нижнее Побчжье в Аотичную Элоху, *МИА*, № 50, стр. 35. 括弧については注(2)。
- (17) Harden, D. B. *op. cit.*, pp. 95–127.
- (18) *ibid.*, pp. 20–24.
- (19) von Saldern, A. *op. cit.*, pp. 15–18, pl. 3.
- (20) Clairmont, C. W. *op. cit.*, pp. 65–58, pl. XXV.
- (21) Doppelfeld, O. *op. cit.*, SS. 64–65, Taf. 152, 153.
- (22) von Goethert-Polaschek, K. *op. cit.*, S. 52, Taf. 38: 168, 174.
- (23) *ibid.*, S. 54, Taf. 38: 182.
- (24) von Ekholm, *op. cit.*, p. 34, fig. 12.
- (25) *ibid.*, p. 30, Map 1.
- (26) *ibid.*, p. 37, figs. 33, 34.
- (27) Ponzi, M. N. *op. cit.*, pp. 294–309.
- (28) *ibid.*, p. 359, figs. 157, 161, No. 71, (IM: 30294).
- (29) *ibid.*, p. 361, figs. 157, 161, No. 72, (IM: 33681).
- (30) Gullini, G. et al. “First Preliminary Report of Excavations at Seleucia and Ctesiphon, Season 1964”, *Mesopotamia*, Vol. I, 1966, pp. 3 ff. etc.
- (31) Ponzi, M. N. *op. cit.*, p. 361.
- (32) 安家瑤, 前掲書, 419—420頁。
- (33) 榎原考古学研究所, 前掲書, 82頁。安家瑤, 前掲書, 419頁。
- (34) 南京大学歴史系考古組, 前掲書, 36—37頁。
- (35) 同書, 44—45頁, 図3。
- (36) 榎原考古学研究所, 前掲書, 25, 35頁。
- (37) 同書, 46—47頁, 84—87頁。
- (38) 東京国立博物館, 『東洋古代ガラス——東西交渉史の視点から——』, 1980, 20頁, 図47。
- (39) 榎原考古学研究所, 前掲書, 図版32。
- (40) Сорокина, Н. П. (1965), *op. cit.*, стр. 204 f.
- (41) 榎原考古学研究所, 前掲書, 84頁。
- (42) Сорокина, Н. П. (1965), *op. cit.*, стр. 204 f.
- (43) Harden, D. B. *op. cit.*, p. 16.

- (44) Clairmont, C. W. *op. cit.*, p. 2.
- (45) Doppelfeld, O. *op. cit.*, SS. 61–65.
- (46) Almgren, O. “Die Funde Antiker Gläser in Skandinavien”, in Kisa, A: *Das Glas im Altertume*, III, Leipzig, 1908, SS. 904–907.
- (47) Ponzi, M. N. *op. cit.*, pp. 309–310.
- (48) 安家瑤, 前掲書 420 頁, 報告書は『鄂城六朝墓』として出版予定。
- (49) 南京市文物保管委員会「南京老虎山晉墓」, 『考古』, 1959 年第 6 期, 北京, 288—295 頁。
- (50) 南京市博物館「南京象山 5 号, 6 号, 7 号墓清理簡報」, 『女物』, 1972 年第 11 期, 北京, 23—41 頁。
- (51) 黎瑤渤「遼寧北票縣西宮宮子北燕馮素弗墓」, 『文物』, 1973 年第 3 期, 北京, 2—28 頁。
- (52) 樞原考古学研究所, 前掲書, 82 頁。
- (53) 同書, 83 頁。
- (54) このタイプは, 初期ローマン・ガラスの中心地であったアキレイアなどばかりでなく, 当時の辺境地域にも輸出されており, 例えば, スイスのウィンドニッサ (Vindonissa) や北欧デンマーク, ローラント (Lolland) のイエリングエ (Juellings) などでも出土している。ウィンドニッサ出土例は, Berger, L. *Römische Gläser aus Vindonissa*, (Veröffentlichungen der Gesellschaft pro Vindonissa, Band IV), Basel, 1960, SS. 30–33, Taf. 4:49, 50. イエリングエ出土例は, von Ekholm, G. *op. cit.*, p. 32. fig. 3.
- (55) *ibid.*, p. 33.
- (56) von Ekholm, G. “Orientalische Glasgefäße in Skandinavien”, *Eurasia Septentrionalis Antiqua, Bulletin et Memoires*, X, Helsinki, 1936, S. 62, Abb. 1; Berger, L. *op. cit.*, S. 71, Taf. 10: 167, 19: 59.
- (57) Harden, D. B. “Excavations at Kish and Barghuthiat 1933,” *Iraq*, Vol. I, part 2, London, 1934, fig. 4, pl. 7.
- (58) 樞原考古学研究所, 前掲書, 48—52 頁, 第 29, 30 図, 87—88 頁, 図版 51。
- (59) Harden, D. B. *op. cit.*, (1936), pp. 47 ff.
- (60) 南京市博物館, 前掲書, 31 頁, 図版 5: 1。象山以外では, 南京市の汽輪電機廠大墓から出土している: 南京市博物館「南京北郊東晉墓發掘簡報」, 『考古』, 1983 年第 4 期, 北京, 319—322 頁。
- (61) 原田淑人「四世紀前後の中国に於けるローマ・ガラス容器の愛好熱とその輸入経路」, 『聖心女子大学論叢』第 24 集, 1965, 21—33 頁。